世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。

マレーシアの中学校で環境教育を教えた経験を持つ元青年海外協力隊員の屋代さん（右）から、油ヤシプランテーションに関する説明を受けた子どもたちは、環境破壊や格差拡大を伴う開発について考え、激論を交わした

第13回

先住民から学んだ、生きる力

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト受賞者研修inマレーシア（前編）

開発途上国の現状や日本の国際協力に対する理解を深めてもらうことを目的に、全国の中学・高校生を対象にエッセイを募集する「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」。2006年度は中学生2万8123人、高校生1万5962人の応募があり、その中から選ばれた最優秀・優秀者上位22人には、副賞として約1週間の海外研修旅行が贈られた。07年7月にマレーシアで実施された06年度海外研修の模様を、2号にわたって紹介する。

日本につながる油ヤシプランテーション

「ここを開発するので立ち退いてください」

「われわれは今のままで満足している。開発の必要はない」

「周囲が発展していく中で、いつまでも変わらない生活を続けるのは無理だ」

緑豊かな熱帯雨林に覆われた、マレーシア・ボルネオ島サラワク州ミリの国立公園。そこで生活する先住民イバン族の村で、熱帯雨林伐採を伴うプランテーション開発をめぐり白熱した議論を交わすのは、2006年度の「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」で最優秀賞※を受賞した5人の中高生だ。07年7月にマレーシアで実施された約1週間の海外研修では、自然とともに生きる先住民の暮らしを体験してもらおうと、2泊3日のホームステイプログラムが用意され、その一環としてシミュレーションゲームが行われた。狙いは、同国の最大産業である油ヤシプランテーションが引き起こす自然破壊や地域間格差といった問題を理解し、食品やせっけんなどの原料として油ヤシからできるパーム油を輸入する日本社会とのつながりを考えること。研修のコーディネーターを務める屋代（やしろ）英二さんは、村でこのゲームを行う理由について「実際に開発の影響を受ける村に身を置いて話し合うことで、複雑な油ヤシ経済を現地の人々に近い視点でとらえられるから」と話す。

ゲームでは、プランテーション開発を進めるマレーシア企業と村人を仲介するマレーシア政府の役人を屋代さんが演じ、中高生は、マレーシア企業の幹部やパーム油を輸入する日本の洗顔料メーカー企業の職員、先住民の村の村長と村人、環境保護を行う日本のNGOスタッフとして、それぞれの主張を展開。前日に油ヤシプランテーションを訪ねた中高生たちは、イバン族の中には、近年の環境破壊の影響で自給自足の生活が脅かされ、プランテーションで働いて現金収入を稼ぐ人がいることも聞いており、問題の本質に迫る議論を行った。

最もヒートアップしたのは、マレーシア企業の幹部を演じた金床（かなどこ）菜々子さんと、NGOスタッフ役の羽住（はずみ）恵理さんのやりとり。「森の生態系を壊す開発をやめるべき」と主張する羽住さんに対し、金床さんは「よそ者にとやかく言われたくない。開発すればたくさんの雇用が生まれる。それより大量のパーム油を輸入する日本の消費生活を何とかしたらどうだ」と反論。議論は続き、収拾がつかなくなったところで、屋代さんが仲介に入った。

ゲームを終え、羽住さんは「発言しながら自分の言葉と日本人の生活との間に矛盾を感じた。日本の消費生活を見直すことから始めたい」と感想を述べた。また、村長役を務めた川崎康太さんは、「企業や政府の主張が激しくてうまく発言できなかった。弱い立場に置かれている村人の気持ちが分かった気がする」と複雑な表情を見せた。その後、子どもたちは、熱帯雨林の生態系や先住民の生活環境を損なわない開発の在り方について考えた。

自然とともにある先住民の暮らし

一方、イバン族の伝統的な生活に触れたことも貴重な経験だった。この村では、207家族596人が数世帯ごとに「ロングハウス」と呼ばれる高床式の長屋に隣り合って暮らしている。電気やガス、水道はなく、日の出とともに起き日が沈めば寝床に入る生活が今も続けられている。洗濯や入浴は近くに流れる川で行い、皿洗いや歯磨きはタンクにためた雨水を節約しながら使う。中高生にとっては初めての体験ばかりで、「不便だね」と漏らしたり、「プライベートの空間がなくて息が詰まらないの？」「遊びに行くところがなくて退屈じゃないの？」と村長に質問する子もいた。

だが、ホームステイ先の家族や村人の温かいもてなしを受け、寝食を共にするうち、徐々に村の生活に慣れた子どもたち。村を去るころには「みんなが助け合いながら暮らしていていいな」「子どもの笑顔が輝いていて、みんな幸せそう」と話していた。

羽住さんは「日本で暮らす私とはまったく異なる環境の中で生きている人がいることがよく分かった。ここで感じたことを忘れず、これからも遠い国に対する想像力を持ち続けたい」と語り、村での思い出を心に刻み付けていた。

JICAの活動や現地の人々の生活を視察・体験することを通して、日本と途上国とのつながりを理解し、自分たちの社会を振り返り、グローバルな視野で考え行動する力をつけることを目指す海外研修。次号では、リサイクルや美化活動に取り組む中学校や、環境教育に尽力する青年海外協力隊員の活動現場を訪問した様子を報告する。発展とともに浮上するマレーシアの環境問題について学んだ中高生は、何を感じ、考えたのだろうか――。

※JICA理事長賞、外務大臣奨励賞、文部科学大臣奨励賞。優秀賞、審査員特別賞受賞者には、タイおよび中国の研修旅行が用意されている。

イバン族の村を訪れた中高生。「ロングハウス」で過ごした2泊3日は、昔ながらの暮らしを体験する貴重な機会となった

（左）パーム油の原料となる油ヤシを観察する藤野朋子さん
（右）村を回り数種類の葉を集める茅野実苗さん。それぞれの感覚で、緑豊かな村を探索する活動のひとこま

2007年度「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」は229人が受賞

3月8日、2007年度「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」の授賞式がJICA地球ひろばで行われた。07年度の応募者数は、06年度より5,325人多い49,410人（中学生の部32,390人、高校生の部17,020人）で、計229人が受賞。JICA理事長賞を受賞した東京学芸大学附属国際中等教育学校の武田直樹さんと岩手県立盛岡第一高校の鈴木啓生さんは、それぞれ「ファスィに教わった『幸せ』」「大切なのは、知ること、伝えること」と題したエッセイで、途上国の人々への思いや世界のためにできることをつづった。

大島賢三JICA副理事長は「応募者数は年々増えており頼もしい。国際的な視野を身に付け、日本が世界のために何をすべきか考え続けてほしい」と話した。また、中学生の部で審査員長を務めた脚本家の小山内美江子さんが、上位入賞者のエッセイに対する感想を述べるとともに、将来国際協力の現場に出て一緒に活動しようと呼び掛けた。高校生の部審査員長で女優・エッセイストの星野知子さんは「海外での体験だけでなく、日本で普通に暮らす中で遠く離れた人のことを思う心が伝わる作品もたくさん入賞した。途上国の現実は厳しいが、迷い悩みながらも国際的に貢献していってくれることを期待している」と語った。

受賞者一覧と最優秀・優秀作品は、JICA地球ひろばホームページ（http://www.jica.go.jp/hiroba/join/sanka/essay/index.html）で閲覧可能。

なお、08年度の募集期間は6月から9月までの予定で、JICAではより多くの中高生の参加を呼び掛けている。募集に関する詳細は次号参照。